

<特集補遺「まえがき」>

特集補遺「まえがき」

Special Issue : Foreword

風間 伸次郎

Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

1. これまでの経緯と今回(24号)での方針について

2009年に『語学研究所論集』(以下『語研論集』)の「特集」が開始され、昨年度刊行の23号まで、10のテーマに関する特集が行われてきた。その内容を振り返ると、14号:受動表現、15号:アスペクト、16号:モダリティ、17号:ヴォイスとその周辺、18号:所有・存在表現、19号:他動性、20号:連用修飾的複文、21号:情報構造と名詞述語文、22号:情報構造の諸要素、23号:否定、形容詞と連体修飾複文、となっている。まだとりあげていない文法カテゴリーも多くあるが、性や数、名詞類別などの名詞の文法カテゴリーについては、これを持たない言語も多いので、通言語的なデータ収集には適していないと思われる。10年目には、落穂拾いではないが、なるべくそれまで取り上げていなかったものを残さず取り上げることを目指した。こうして名詞述語文、形容詞述語文を扱った上で、動詞述語文については主だった動詞の文法カテゴリーを取り上げ、さらに連体・連用の両複文について扱ったアンケートの総体を形成することができた。これにより、ここでひとまず新しい特集を組むことを止めることにした。そこで今号ではこれまでの特集でデータの得られなかった言語の補遺を集め、データ全体を揃えることを目指すこととなった。

2. 今回の時点でのデータの収集状況について

幸い、申請した競争的経費も認められ、今回多くの補遺のデータを集めることができた。ここではまず本学にある27専攻語のうち、日本語を除く26専攻語について、今号ではどのような言語の補遺のデータがどこまで集まったのか、という点について整理してみよう。

すでにアラビア語とモンゴル語は以前より全10年度分のデータが揃っている。これに今回2回分のデータを加えたフランス語、同じく7回分を加えたポルトガル語、1回分を加えた中国語、6回分を加えたラオ語、7回分を加えたカンボジア語、1回分を加えたペルシア語、6回分を加えたトルコ語、9回分を加えたベトナム語について、全データが揃った。したがって全回分のデータが揃ったのは合計10言語ということになり、これは26言語全体の1/3強に当たる。

今回はさらにポーランド語に1回分が加わり、残るは16-21の5つとなった。同様に、チェコ語に2回分が加わり残るは15, 16, 19, 20, 21の5つに、インドネシア語に1回分が加わり残るは17, 19, 20, 22, 23の5つに、マレーシア語に1回分が加わり残るは15のみに、タイ語に5回分が加わり残るは15-17, 20, 23の5つに、ビルマ語に6回分が加わり残るはあと15のみ、となった。貴重なデータの収集に努力して下さった先生方、院生の方々、手配や依頼に奔走して下さった『語研論集』編集幹事・編集委員長の先生方、査読をして下さった先生方、補佐の深尾さん、謝金の円滑な運用に配慮して下さった事務の方々などの御尽力なしには全く不可能であったことだろう。さまざまな方々の御協力に深く感謝申し上げたい。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

今回新しいデータは得られなかったが、ドイツ語で残るのは17と19のみ、イタリア語は15~18,21の5つ、スペイン語は15,16,22の3つ、ロシア語は17,19,21の3つ、朝鮮語は14のみ、ウルドゥー語は22のみ、である。

一方、英語とフィリピン語、ベンガル語に関しては現時点ではなお1回分もデータがない。ヒンディー語も20のみ、「ウルドゥー語・ヒンディー語」としてのデータがあるのみである。

3. 今回収集されたデータにおける意義

3.1. 東南アジア地域・孤立型言語を中心とした類型論研究における意義

上記のように、今回は特に東南アジア大陸部の孤立型の言語について多くのデータが集まった。この地域は本学においてヨーロッパとともに多くの言語の専攻語が開かれている地域であり、本学の誇るべき知の領域であると言えるだろう。類型的には同じ孤立型であるとはいっても、ベトナム語とカンボジア語はオーストロアジア語族、タイ語とラオ語はタイ・カダイ語族、中国語はシナ・チベット語族と系統を異にしている。ビルマ語もかつてはより孤立型の言語であった可能性がある。このように系統は異なるがよく似た類型的特徴を示す言語間の対照を通じて、孤立型の言語が示す他の類型的な特徴、すなわち孤立型であることと内的・有機的な関連を示す特徴の束が解明されていくことが期待できる。一方でそうした諸特徴はこの地域に特有の共通特徴である可能性も考えられよう。同じく孤立型の言語が多く話されている西アフリカでのデータと対照する時がくれば、類型的な特徴と、地域に固有な特徴とを峻別することも可能になってくるに違いない。東南アジアの言語を専門とされる先生方、院生の方々の熱心な御協力に重ねて深く感謝する次第である。

東南アジアには、十分に調査されていないたくさんの言語が存在する。東南アジアの国々で国語／公用語とされている上記の言語についての全データが揃えば、これを今後それぞれの国での少数言語の文法調査において「調査票」として使用することも期待できる。

3.2. 個別言語の記述研究における意義

言語類型論の研究への貢献をまず記したが、このような文法の多方面にわたるデータおよびその収集はひるがえって個別言語の研究の発展に益するところも大きいと考える。筆者はもともとツングース諸語という個別言語の記述にたずさわってきた一研究者である。自分が長年専門としてきた言語についてはよく知っているつもりになっていたし、『語研論集』の「特集」のデータを集める時も、自分の専門の言語に関しては特に新しい発見はないだろうとタカを括っていたものである。しかしたいてい一つや二つは新しい発見があり、自分の思い上がりを恥じるばかりだった。専門の言語は見慣れているためにそれが自分にとってデフォルトとなってしまう、現象や表現自体はよく知っているものの、それがなぜその形でなければならないかについて深く考えなくなってしまうのである。毎日のように学生にその言語を教授していればその傾向はなおさら著しいであろう。

一方で、かなり似ているタイプの言語だが自分の専門の言語とは少し違う、というような言語のデータを見ていたり、類型論的に言われている一般的傾向などについて知ったりすると、今まで見過ごしていた自分の専門の言語の特殊性や、世界の言語における位置づけがわかってくる。すると新しい論文のテーマも浮かんでくるのがよくある。研究者というものは、一つの問題を追及し、究めていかなければならないだけに、数年間あるテーマに取り組んでいると、さっぱりそれ以外の問題に対して感覚が働かなくなってしまうことが往々にして起こり得る。このような状況の打破にも「特集」のデータ収集は意義を持っているものと考えている。今回のデータ収集には、院生の方々にもお世話になった。院生の方々には貴重な研究の時間を割いていただいて非常に恐縮しているが、筆者の経験に基づいて言えば、若く頭が柔らかいうちにその言語に存在するさまざまな文法の問題点について広い視野を持つことはきわめて重要であり、「特集」のデータ収集をつうじて各表現の

機能や違い、先行研究の分析などについて知ることは今後の研究生活にとって大きな助けとなるものと考えられる。

ただし、「特集」のデータ収集は媒介言語による聞き出し (elicitation) にすぎない、という大きな問題点がある。筆者の研究しているような消滅の危機に瀕した少数言語の場合、媒介言語 (筆者の場合はもっぱらロシア語や中国語) からの翻訳もできるような若年層の話者 (といってもせいぜい60代だが) は、たとえ母語が少数言語の方であっても、今日の日常では媒介言語の方に接している時間の方が圧倒的に長く、子供や孫たちとの会話も全て媒介言語の方にシフトしてしまっている、というような状況がある。そのような状況下で聞き出しによって得た例文は、媒介言語からの直訳に近い表現、すなわち媒介言語の構造をなぞったような表現になってしまうことが多い。その言語の本来的な表現や文法構造を知るためには翻訳でないデータによる必要がある。ただ、上記のような場合でも、聞き出しによって得たデータは全く無意味なものでもない。構造の違い別の言語から大きな影響を受けても最も変わりにくい部分というものもあるし、簡単に置き換えられてしまう部分もある。すなわち言語接触のプロセスを知るための資料としての価値があるということになる。

このような状況でデータを収集している者にとっては、本学の26専攻語のように国語や公用語となっている強大な言語における状況はうらやましい限りである。しかし一方でそのような強大な言語のデータにおいては、今度は逆に媒介言語の表現や構造とは全く異なった表現、すなわち「意識」とも言うべき表現が現れることもよくある。聞き出しの例文には「前後の文脈がない」という問題点もあり、対象の言語からいくつもの少しずつ異なった (場合によっては大きく異なった) 表現が現れることもよくある。しかしこれも悲嘆するには当たらず、むしろ言語研究者としては喜ぶべき事態である。媒介言語との構造の違いや、細かい表現の違いなどを研究する糸口となるからである。日本語が媒介言語であった場合、そこから得られた成果はその後日本語母語話者に当該言語を教える際の助けにもなるし、日本語との対照言語学的な成果にもなる。今回のデータを見ていても感じることであるが、言語によって単に得られた例文を一つずつ列挙しているのみのものもある一方で、いくつものアンケート例文に関して、複数の表現を上げその違いを取り上げたり、先行研究の分析も参照し自身の分析を加えているものもある。後者の分析は分析者自身の今後の研究の展開にもつながるであろうし、これを読んだ後進の学生のレポートや卒論などのテーマやそれによる本格的な研究にもつながるのではないかと考える。特に稿末に文献のあげてあるものは、後進にとって大きな助けとなるだろう。個別言語の研究、教育においても今後この「特集」のデータをもとにさらに活発な議論が展開されることにつながっていくことを望む。

4. その他の言語

『語研論集』の特集でデータが公開されているのは、上記の26専攻語ばかりではない。本学の有するコネクションのおかげで、その他にこれまでバルト諸語、アルタイ諸言語のいくつかなどについてかなり多くの貴重なデータが収集されてきた。フィンランド語のデータも多い。他方、グイ語やメエ語、ニブフ語など、話者も少なく、類型論的にきわめて貴重な言語のデータもいくつか存在する。今後はこれらのデータについても同時に拡充していきたいと考えている。系統や地域に偏らないデータが類型論的な研究にとってきわめて重要であることはいうまでもない。ただ (毎号書いているが)、新大陸の言語やオーストラリア先住民の言語、カフカースの言語などのデータは今もなお皆無である。

上記で本特集データの「調査票」としての使用の可能性について述べたが、筆者はすでにロシアと中国におけるいくつかの言語の現地調査において、本特集データのうちのロシア語と中国語のものを「調査票」として何度にもわたって活用させていただいた。ここに記して感謝するとともにその面での価値を強調しておきたい。スペイン語およびポルトガル語のデータは今後中南米の諸言語を調査する上できわめて貴重な調査票として活躍することだろう。日本国内にもインディオの言語の話者はある程度いらっしゃるに違いない。この調

査票が活用されることを期待したい。一方、北米やオーストラリアの言語の調査やデータ収集のため、英語のデータの公開は急務である。

5. 今後の展望と問題点

26 言語の 10 年分の特集であるので、本学の専攻語に限った限りでも、延べ 260 あることになるが、残っているのはそのうちの 76 であり、これは 29.2%に当たる。今回の補遺では 55 の新しいデータが得られたので、次の 25 号では 260 の全データが揃うことが期待される。

英語に関してはあるバイリンガルの方にお願ひし、すでにデータを得ている。人材その他の理由から、収集の難しさが予想される言語もあるが、全データの収集に向けて力を尽くしていきたいと考えている。

一方で、この『語研論集』の特集で収集されたデータを、言語と項目から自由に検索するシステムも作成中である。これは語研の HP に現在「語研論集データベース」として公開されている。ただし現在公開されているデータは、言語数に関してもテーマに関してもなお一部にとどまっている。グロスも不統一な状態である。全データ収集の後、その全データがこのデータベースに組み込まれる形となれば、文法の対照研究および類型的な研究にとって十全な貢献をなすものとなることだろう。

筆者はこれまでの 10 年の特集の各回において「まえがき」を執筆し、その回に集まった分のデータに基づいて類型論的観点からの分析を行ってきた。当然のことながら集まった言語データの範囲内で行った分析であるため、類型論的観点からはなおきわめて不十分である。しかも各回ごとにそのデータの母体は少しずつ異なったものとなっている。もし本学の 26 専攻語の全データが揃えば（もちろん通言語学的な分析を提示するにはなおもはなはだ不十分ではあるものの）、その同じ母体の範囲内での統一された分析結果を提示することができるようになる。その結果は、今後の本学での言語学の教育においてはきっと有用なものになるだろうと考えている。

近年では、学生のレポートにも『語研論集』のデータを参照したものが散見されるようになってきた。これはネットでの検索により、関心のある言語の個別の構文に直接アクセスできることが利点となっているに違いない。このように教育面においても、「特集」のデータは言語学ならびに個別言語への理解を深めるための利便性の高いリソースとなってきている。

以上のような理由から、今後特集のデータの集積ならびに「語研論集データベース」がより十全なものとして確立されていくことを強く望むものである。

今回の「まえがき」には言語自体の分析がいっさいなく、11 年間この「特集」に取り組んできた者の月並みな感想となってしまった。したがって駄文もいいところであるが、御批判御叱正等いただければ幸いである。特にこの「特集」ならびに「語研論集データベース」の収集・作成・活用等に関して、より良い方策やアイデアをお聞かせいただけることを望んでいる。